



Title	太宰治「破産」の構造
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	阪大近代文学研究. 2008, 6, p. 68-80
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92654
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

太宰治「破産」の構造

斎藤 理生

はじめに

井原西鶴の諸作品を翻案した『新釈諸国噺』（生活社、昭和二十年一月）は、太宰治の生前、最も版を重ねた著作であったという⁽¹⁾。従来この創作集には、太宰研究のみならず、西鶴研究からのアプローチもなされてきたため、研究の蓄積は決して少なくはない。ただ創作集に収められた十二の短篇それぞれについては、「貧の意地」や「人魚の海」のように複数の論者に取りあげられてきた小説と、木村小夜氏の一連の論考⁽²⁾および山内祥史氏編『太宰治研究』の特集⁽³⁾以外ほとんど等閑に付されてきた小説との差が顕著である。本論でとりあげる「破産」も、太宰自身にとつては「貧の意地」と並んで『新釈諸国噺』中でも「自信作」であつたようなのだが⁽⁴⁾、作品全体を分析した論者は、木村氏の「太宰治「破産」論——敗北の理由——」⁽⁵⁾が唯一のものである。本論は、この木村氏の論を踏まえつつ、「破産」のより細部に分け入った読解を試みようとするものである。

一 原典「三匁五分曙のかね」との差異

「破産」は作品の末尾に『日本永代蔵』巻五の五「三匁五分曙のかね」の翻案であることが明記されている。「三匁五分曙のかね」には、冒頭と物語の半ばに、語り手による、結婚を財産の多寡によつて決めたり、子どもに甘くして家を乱したりする親への批判がある。特に結婚や財産への関心は、この作品の副題「作州にかくれなき悋気嫁 蔵合といふは九つの蔵持」とも対応しており、西鶴作の主要モチーフになっている。しかし太宰はそうしたモチーフにはこだわらず、語り手の批判も取り除いて、次のようなストーリーだけを借り受けている。

儉約に儉約を重ねることで美作の国で蔵合に次ぐ長者になつた万屋の初代は、見こみのない息子を勘当し、節儉に励む妹の息子を養子に迎えた。養子は万屋を継ぐにあたつて悋気

気に抑えられたので、万屋の財はますます増えた。ところが初代夫婦の死後、嫁は都の風俗に感化されて格気をしなくなつた。二代目は公然と遊興に耽るようになり、万屋の秩序は崩壊し、財産も枯渇した。そこで一念発起した二代目は、兩替屋を営むことで万屋を再興しかけた。しかし大晦日の夜、わずかな銀貨が交換できずに内情があらわれ、破産した。

以上のようなストーリーを土台に、「破産」はどのような点に特色を出しているのだろうか。木村小夜氏は前掲論で、「三匁五分曙のかね」の特徴を、嫁の格気によって蓄財が進み、のち彼女の変貌によって財産が蕩尽されてゆく点に見ている。その上で氏は、「太宰の『破産』でも、嫁の両義的な役割は同様に温存されてはいる。が、むしろ、その変化を作り出し、それを積極的に推し進めた主人公として、ここでは養子の存在が一貫して前面に押し出されている」と述べて、原典における嫁を中心とした物語から、太宰作では二代目を中心とした物語に変わっていることを明らかにしている。もともとな指摘であり、木村氏がそこから明らかにした、いささか過剰に自己を待む二代目が、他者の期待を「先回り」して当座をしのぎつつ、最終的には自らの欲望の実現を目指すものの、「想定外の事態」に裏切られてゆくという「敗北」のプロセスも納得される。

ただ本論では、木村氏の論ではあまり触れられることのない部分に注目することで、二代目を、ひいては小説全体

を読み直したいと思う。

『新釈諸国噺』ではどの作品も原典の西鶴作より分量が多くなっているが、「破産」も「原作はわずか三頁ほどのものであるが太宰はこれを十頁ほどに拡大し」⁵ている。分量が増えているのは、「破産」では、小説の最初と最後に美作の国の人々の様子が描かれていたり、嫁の大声と浪人の大声が対応していたりと、独自のプロットがあり、かつ、二代目の内言や語り手の介入や嫁の台詞など、物語が細部にわたって書き込まれているためである。太宰はそれらを描くに当たって、「三匁五分曙のかね」以外の西鶴作品も積極的に活用している。浦田義和氏は、「破産」では「作品の自立を助け」「ヴィジュアルなイメージを喚起するため」に「具体的なものをはじめとする細部が書きこまれていると述べている」⁶。が、ひとたび書き込まれた叙述は、細部とはいえ、小説のさまざまな箇所と響きあうことで、リアリティをもたらしこととは別の意味合いも生成している可能性がある。

そのような細部の働きを浮き彫りにするためには、特に語りに注意を払う必要がある。「破産」の語りは、万屋の蓄財または浪費が著しく進むときに、連用形や体言止めを多用することで一文を終えぬまま一気に語りおろしてゆく傾向を持つており、そのスピード感が金の増減の激しさに対応しているのだが、語りが果たしている役割は、そのような物語の雰囲気や醸成することだけではない。さしあたり次章では、

「破産」の中心人物である二代目の言動を、語り手がどのよう
に意味づけているかに目を配りながら分析する。

二 二代目の変化

二・一 目をそらす二代目

まず、二代目の内言が最初に語られる、嫁の愔氣に辟易する
場面を確認する。

かねて、こんな時にこそ焼きもちを焼いてもらふために
望んでめとつた女房ではあつたが、さて、実際こんな工
合ひに騒がしく愔氣を起されてみると、あまりいい氣持
のものでない。養父母の氣にいられようと思つて、愔氣
の強い女房こそ所望でございます、などと分別顔して言
ひ出したばかりに、これは、とんでもない事になつた、
と今はひそかに後悔した。

当初「あまりいい氣持のものでない」と考えていた二代目
は、やがて「とんでもない事になつた」と「後悔」するほど
に鬱屈を募らせるようになる。しかし、引用の後半に見られ
る、初代夫婦に迎合した発言が思わぬ事態をもたらしてしま
つたという考へには、二代目の自己欺瞞が隠されていないだ
ろうか。この直前に、語り手が「この養子、世に珍しく仕末
の生れつきながら、量り知られぬおびただしき金銀にはか
にわがものにして、さすがに上氣し、四十はおろか三十にも

ならぬうちに、つき合ひと称して少し茶屋酒をたしなみ」(傍
線は筆者による。以下同じ)と説明していたように、愔氣へ
の悩みは、二代目が大財産を譲り受けて浮かれ、予想以上に
早く茶屋あそびを始めたことに起因している。しかし彼はそ
のような自分の変化を対象化していない。代わりに、養父母
の期待に迎合したせいだ、と事の発端を自分以外のところに
求めているのである。

二代目は欲望を抑制するために、「世の中にお湯錢くらゐ
安いものはない、今夜あそびに出掛けたら、どうしたつて一
両失ふ、お湯に酔ふのも茶屋酒に酔ふのも結局は同じ事さ」
などと言ひ放つようになる。しかしこの言葉はすぐに語り手
に「わけのわからぬ負け惜しみの屁理窟」「瘦我慢」と言わ
れてしまふし、彼自身結局この「屁理窟」では納得できず、
不満ばかりが募るため、欲望を抑制するどころか、むしろた
ざらせてしまふ。

しかも、二代目の「屁理窟」はまさに「わけのわからぬ」
論理に基づいた「負け惜しみ」であるがゆえに、欲望の累積
に伴つて、いつそう身勝手な解釈へと発展してゆく。二代目
は、「せつかくお金が喰ふほどありながら愔氣の女房をもら
つたばかりに眼まひするほど長湯して、さうして味噌漬の
話や塩鮭の話を拝聴してゐなければならぬ」と思い詰めるよ
うになる。退屈な生活は女房のせいだ、そんな女房を娶つた
のは初代夫婦の歛心を買つたためだつた、というのが二代目の

後付の解釈である。彼は対応を誤ったと考えることで、儉約ぶりを評価されて万屋を継ぐやいなや浪費を始めてしまった自身の豹変が問題の根本にあることから目はそらす。

このような二代目に対して、愀氣した嫁が叫ぶ「鏡を覗き込んで、きゅつと口をひきしめたり、につこり笑つたり、いやいやをして見たり、馬鹿げたひとり芝居をして、いつたいそれは何の稽古のつもりです。：：：なんだいそんな裏だか表だかわからないやうな顔をして、鏡をのぞき込んでにつこり笑つたりして、ああ、きたない、そんな事をするひまがあつたら鼻毛でも剪んだらどう？ 伸びてゐますよ」(：：：は省略を示す。以下同じ)という非難は、滑稽な罵詈雑言にとどまらぬ、二代目の視線の偏りを言い当てたものになっている。

二代目は茶屋酒をたしなみ始めてから鏡の前に立つようになるが、鏡はありのままを反映していても、彼は自分の姿を偏った視線で見ている。表情を作るより先に鼻毛を剪め、と指摘する嫁の発言は、他者が見たときには明らかな問題を、鏡を覗きこんでいる本人が見落としていることを示している。

二代目は、鏡に映った自分の問題を見落としているのと同じように、万屋を傾ける原因となる自分の変化を見落としているのである。

このあと二代目は、上方で「豪遊を試み」るさいには金は使うためにあると考え、そのために財産を使い果たしたら、人間は独力で金を稼ぐべきだと考える。彼は何度も生きる指

針を変えるのであるが、そのような自分を対象化することはない。

二代目は万屋を継いで浮かれた気持ちになつて以来、自分を見つめ直すことがなかった。あたかもその報いのように、いよいよ彼が破産するときには、茶屋あそびをして「眼つきは変り、顔も青く痩せて」いたころの自分と同様の「眼のすどい痩せこけた浪人」の訪問を受けることになる。すなわち、目をそらしていた「破産へと自らを追いやっていく数年前の男自身の合わせ鏡」(3)に直面させられることで、二代目はもう一度破産するのである。

二・二 二代目の表と裏

茶屋あそびを覚えた途端に嫁の愀氣に抑えこまれ、不満を募らせた二代目は、本心を隠すようになる。「うはべ」はそれまでと同じ態度でいながら「内心」では初代夫婦の死を願つたり、嫁に「氣保養」だと説明して腹の中では上方で遊ぼうと計画したりする。こうした二代目の表と裏を使い分ける態度は、「帳場で神妙を装う番頭」、「聞えよがしの大声」で本を読む長松、「ほどきものに余念がなささうな振り」をするお六ら、使用人たちに模倣される。二代目が嫁に抑えつけられてくすぶっているがゆえに家の秩序が保たれ万屋の財産がますます増える、というこの場面は、「内心」何を思つて

いようが、本音と建前を使い分ける意志が存続している限り、事態は深刻なものにはならないことを示している。しかしひとたび本音を隠す必要を覚えなくなったとき、「秩序は見る影も無くこはされて」しまう。

したがって二代目が破産寸前にまで至った万屋を両替屋として再出発させるにあたっては、さしあたり建前だけでもしつかりさせる必要があった。二代目は、「お金がもうこの家に無いといふけれども、それは間違ひ、必ずそのやうな輕はずみの事を言つてはならぬ、暗闇に鬼と言はれた万屋の財産が、一年か二年でぐらつく事はない、お前は何も知らぬ」と番頭にさえ嘘をついて、「万屋の信用」を活用する。

ところが「三年後」、「表むきだけではあるがとにかく、むかしの万屋と変わらぬくらゐの勢ひを取りもど」した二代目は、「商人は表向きの信用が第一」「長者とはこんなやりくりの上手な男の事です、と女房と番頭を前にして得意満面で」語るようになつてゐる。ここからは、二代目が当初は商売上の必要から万屋の内情を隠していたのだが、両替屋として当座をしのいでゆくにつれて、建前でしのぐやりかたを、内情を隠すための余儀ない手段ではなく、「長者」の手管だと「得意満面」で語るようになり、現金がないことの不安も忘れていった様子がわかる。仮面がいつしか本来の顔のように定着しているのだ。嘘を嘘だと忘れてしまったからこそ、二代目は「正月の飾り物」を売りに来た物売りを「大笑ひして追ひ

歸して、三文はおろか、わが家には現金一文も無いのをいまさらの如く思ひ知つて内心ぞつと」するはめになる。

先に、嫁の二代目に対する非難が、過剰さゆえに（笑い）を誘う罵詈雑言にとどまらず、二代目の視線の偏りへの批判を含んでいることを確認したが、今や「なんだいそんな裏だか表だかわからないやうな顔をして」という発言も注目されよう。二代目は裏と表を巧妙に使ひ分けているつもりでいるが、終盤に至ると彼にも自身の態度が「裏だか表だかわからない」くなつてゐるように読めてくるからだ。

末尾では、そのような二代目のもとに、かつての自分と同じ表情をした浪人が、賈の銀貨を交換しにやってくるのであつた。二代目が当初「明るく微笑んで何気なさうに」接していたその浪人に、内情を暴かれかかったとき、「おや、その顔つきは、どうした」と言われてしまうことは象徴的だ。進退窮まつた二代目は表面を繕えなくなる。賈の繁栄を作り出していた彼は、皮肉にも最後に、誰かが仕掛けた賈金に気づかなかつたことから破滅するのである。

二・三 賈の後継者

初代夫婦の没後、二代目は嫁を懐柔し、ようやく遊蕩三昧の生活を送れるようになる。次の引用は、彼が茶屋あそびに耽る直前に嫁と交わした会話である。

「さうとも、さうとも。」男はここぞと強く相槌を打ち、「それについて、」ともつともらしい顔つきになり、「このごろ、どうも、養父養母が続いて死に、わしも、何だか心細くて、からだ工合ひが変になつた。俗に三十は男の厄年といふからね、」そんな厄年は無い。「ひとつ、上方へのぼつて、ゆつくり氣保養でもして来ようと思ふよ。」とんでもない「それについて」である。

「あいあい、」と女房は春風駘蕩たる面持で、「一年でも二年でも、ゆつくり御養生しておいでなさい。まだお若いのですものねえ。：若い時には思ひ切り派手に遊んだほうがいいの。あたしも遊ぶつもりよ。かまはないでせう？」と過激な事まで口走る。

亭主はいよいよ浮かれて、

「いいとも、いいとも。：それでは、お言葉に甘えて一年ばかり、京大阪で氣保養をして来ますからね。留守中は、せいぜい朝寝でもして、おいしいものを食べてゐなさい。上方のはやりの着物や帯を、どんどん送つてよこしますからね。」といやに優しい言葉遣ひをして腹に一物、あたふたと上方へのぼる。

ここで語り手は、夫婦の對話に介入し、傍線部のようにそれぞれ言葉を相対化することで〈笑い〉を誘う。そうすることで、表面は鷹揚に構える二人が内心で各々の欲望をたぎらせていること、さらには波線部のように、二代目が、嫁が

口走つた言葉に刺激されることでますます過激な方へ踏み外していつていることに、読者の注意を喚起している。

上方に行つた二代目は、茶屋の者たちの——お湯でも酒でもなく——「お世辞」に酔う。彼らのささやく甘い言葉によつて二代目は、自分は「天下のお大尽」だと勘違いし、「金といふものは使ふためにあるものだ、使つてしまへ」と自らをけしかけるまでになる。金がなくなればなくなつたで、「ようし、これからが、わしの働きの見せどころだ、養父からゆづられた財産で威張つてゐるなんて卑怯な事だ、男はやつぱり裸一貫からたたき上げなければいけないものだ、無くなつてかへつて氣がせいせいしたわい」などと素早く新しい生き方に切り替えようとする。だがそうした態度は、語り手に即座に「負け惜しみ」と言われ、「廊の者たち」にも相手にされないことで、読者の前では相対化される。なるほど「ただものではない」二代目は、両替屋を営むことで万屋を再興一步手前のところまでこぎ着ける。しかしそのときも、「来年こそは上方へのぼつて、あの不人情の廊の者たちを思ふさま恥づかしめて無念をはらしてやりたい」などと、儲けることでも遊ぶことでもなく、茶屋の者たちを見返すことだけを目指している点で、彼は上方を後にしてからも茶屋の者たちの言葉に縛られていたと言わざるを得ない。また彼は「お世辞」に酔つて「思慮分別を失」つたことが失敗の原因だったと反省しないのはもちろん、「万屋の信用」を利用した両替屋の

成功は「養父からゆづられた財産」に依存していることに他ならないことにさえ気づかない。

二代目は、万屋の跡継ぎに選ばれ、両替屋として相応の成功を為すだけの才覚の持ち主ではあった。しかし大財産を継いで自分を見失い、「表向き」を取り繕うことばかりに腐心し、財産の大半を失い、商売内容も変えてしまった彼は、万屋を継いだというよりも、贖の万屋を作り上げたに近く、最終的には贖者であることを贖金によって暴露されるのである。語り手は末尾で「人の運不運は知れぬもの」などと述べているが、語られた物語は、二代目の破滅が必然性を持ったものだと言ひ手に理解されるものになっている。

三 嫁の変化

ここまで「破産」が原典とちがって二代目を軸にした物語になっていることを踏まえて、二代目の変貌を中心に考察してきた。ただし、原典において物語の鍵となる人物であった嫁が「破産」において影の薄い存在になっているわけではない。むしろ夫婦をよく似た人物として描いているところに「破産」の特徴がある。

まず、新婚当時の嫁が、色気づいた夫を非難した言葉から確認したい。

「……どだいあなたは正気ですか、わかつてゐますよ、あ

さましい。あたしの田舎の父は、男といふものは野良姿のままで、手足の爪の先には泥をつめて、眼脂も拭かず肥桶をかついでお茶屋へ遊びに行くのが自慢だ、それが出来ない男は、みんな茶屋女の男めかけになりたくて行くやつだ、とおつしやつてゐたわよ、……いいえ、わかつてゐますよ、くやしかつたら肥桶をかついでお出掛けなさい、出来ないでせう、……くやしかつたら肥桶をかついで、」

先に述べたように、こうした嫁の言葉は二代目の偏った視線を鋭く指摘するものでもあったのだが、彼女自身の目にも偏りがあることは否定できない。嫁が夫の気持ちに「わかつてゐます」と断言する根拠になっているのは、「田舎の父」に聞いた言葉である。嫁は父の価値観で夫を判断して怪しんでいる。ただし「父親が九十の祖母とすこし長話をしても、いやらし、やめよ、と顔色を変へ眼を吊り上げ立ちはだかつてわめき散らす」ところを見ると、彼女は単純に父親を信奉しているわけではない。語り手が嫁を「へんな娘」と評するのは、ひとたび正しいと信じこんだ基準を状況に合わせず頑なに守ろうとするからだ。

ところが、初代夫婦の死後、その基準が変化する。「三分曙のかね」において、その変化は、「嫁伊勢参宮して、下向に京・大坂の遊山、人のしやれたる風俗をみならひ、姿を移せば、心もそれになりて、怪しいふ事初心とたしなみけ

れば」と語られていた。つまり、嫁が自ら身なりを変えたことで内面も変わったことになっていた。一方「破産」では、二代目が意図的に「都のしやれた風俗を見せ、野暮な女房を持つたばかりに亭主は人殺しをして牢へはひるといふ筋の芝居を見せて、女房の格気のつつしむべき所以を無言の裡に教訓し、都のはやりの派手な着物や帯をどつさり買つてやつた」ことで、嫁が「肥桶をかついで茶屋遊びする人は無いもの」といふ事もわかり、殊にも格気はあさましいものと深く恥ぢるようになったとされている。

とりわけ芝居を見せることで、それまでとは異なる判断基準を嫁に与えたことが二代目の成功であつた。嫁の芝居好きは単なる趣味に留まらない。生活のスタイルが変わり、「言葉までさばけた口調」に変わっているように、彼女は身も心も芝居に合せている。二代目に「三十のけちんぼうは、早すぎます。見つともないわ。そんなのは、芝居では悪役ですよ」と言うことから、嫁にとつて芝居と現実との距離は無いに等しいことがわかる。

留守中は女房、昼頃起きて近所のおかみたちを集めてわいわい騒ぎ、ごちさうを山ほど振舞つておかみたちの見え透いたお世辞に酔ひ、毎日着物を下着から全部取かへて着て、立つてくにやりとからだを曲げて一座の称賛を浴びれば、

芝居がかった立ち居振る舞いを演ずる嫁は、役者になぞら

えられた自己像を補強してくれる取り巻きの「お世辞」に酔う。かつての嫁は、「女房の毎夜の寝物語は味噌漬がどうしたの塩鮭の骨がどうしたのと呆れるほど興覚めな事だけ」と二代目が嘆いていたように、万屋の嫁にふさわしい儉約をし、日々の生活に密着した話をする存在であつた。ところが芝居を基準に生きるようになると共に、嫁は言葉を投げかけるよりも、受け取ろうとする存在になる。以前の嫁は金銭的には吝嗇であつたが声は惜しまなかつた。それが浪費癖を身につけるに伴つて称讃の声を求めるようになる。現実を差し置いて虚構の世界に生き始めたゆえに、嫁は取り巻きの言葉のいかかわしさにも、目の前で万屋の足場が揺らいでいることにも気づかない。

二代目夫婦は、共に贅沢をするようになったことばかりでなく、周囲の甘い言葉に酔いしれ、自分を見失い、虚構を現実と見まがった点においても足並みを揃えているのである。

四 豹変する人々

二代目の表と裏を使い分ける態度を模倣して表層を繕つていた万屋の使用人たちは、二代目夫婦が欲望をむき出しになると、同じように建前を捨て、思い思いの行動を取るようになる。使用人たちを規制する手だてを何一つ残して行かず上方に赴いた二代目は、彼らがそのような欲望を隠していた

ことに気づいていなかったかと思しい。しかも財産が枯渇したとき「愕然として、まだ百分の一も使はぬ筈だが、ああ、小判には羽が生えてゐるのか、無くなる時には早いものだ」と慨嘆する彼は、自分たち夫婦が使っただけでなく、使用人たちに盗まれていた可能性に思い至らない。二代目は状況に即して変化する人間でありながら、他者の変化に対しては全く迂闊であつた。

万屋の使用人たちと同じように唐突に変化する存在として、二代目が上方で出会う「お世辞を言ふために生れて来た茶屋の者たち」があげられる。原典ではほとんど描かれぬ彼らが「破産」では饒舌である。茶屋の者たちは二代目を「男振りがようて若うて静かで優しくて思やりがあつて上品で」などと褒め尽くす。だが「その上、おほほほ、お金があつてあつさりして」という部分に露呈しているように、彼らはもとより商売としてサービスをしているだけである。だから二代目に金がなくなつたことに気づくと、「他人にものを言ふやうなあらたまつた口調」になり、相手にしなくなる。茶屋の者たちは、客が金を持っているか否かで明確に二つの顔を使い分ける。

この茶屋の者たちと合わせて注目したいのが、美作の国の人々である。美作の国の人々もまた、一人ひとり描き分けられていないため、物語のなかで一見、影が薄い。しかし、原典では陰に隠れているにもかかわらず、「破産」では冒頭と

末尾に登場していることは、一篇における彼らの役割が小さいくないことを示唆している。

冒頭で語り手は、「蔵合さまには及びもないが、せめて成りたや万屋に」という「卑屈の唄をあはれなふしで口ずさんで淋しさうに笑ひ合ふ」美作の国の人々を描いている。彼らは長者たちをうらやみつつ、自分たちとの距離を感じ、あきらめているように見える。ただここで、蔵合と万屋との間に区別があることも見逃してはなるまい。

「三匁五分曙のかね」では、万屋は「人の知らぬ大分限」「ひそかなる手前者」であり、蔵合とちがつて人々には金持ちだと知られていないことが強調されている。しかし「破産」では、美作の国の人々は万屋を金持ちだと知っている。だからこそ二代目が両替屋を営んだとき、美作の国には、「いまは一文無しとも知らず安心してここに金銀をあづける者が多」かつたのだし、蔵合と並び称する「卑屈の唄」もあつた。しかしこの唄では、蔵合には「さま」が付けられているが、万屋には敬称がない。このことは、「せめて成りたや」という言い回しもあいまって、万屋が蔵合に比べると、手の届く存在だと感じられていることを示している。また、人々は蔵合に対しては「自分の金でも無いのに」「その大財産を自慢」するが、万屋に対してそのような自慢をしたとは書いていない。したがって美作の国の人々が、蔵合を崇拜し、うらやんでいることはうかがえるが、万屋に対してはそこまでの

気持ちはない。むしろ妬みに近い感情があったから、末尾で浪人が大声を出すと、「両隣りの左官屋、炭屋も、耳をすまし、悪事千里、たちまち人々の囁きは四方にひろがり」と語られるように、美作の国の人たちは待ち構えていたかのよう
に全員で手のひらを返し、「近所のおかみたち」などはそれ
までにさんざん嫁の饗応に与っていたはずなのだが、誰も救
いの手をさしのべないのである。

「さすがの智者も矢弾つづかず」とあるように、そうした
美作の国の人々の攻勢に対し、二代目は為す術もない。二代
目は茶屋の者たちの豹変で思い知らされていたはずなのに、
過去に学ばず、自らを凝視し得ず、表と裏を混同してしまう
始末であるゆえに、美作の国の人々にも自分にたやすく欺か
れていたのとは別の顔があったことに気づかなかつたのであ
る。

五 初代と二代目との対比

三章で見たように、二代目も嫁も、金をきつかけに変化し
ていることは明らかなのだが、同時に「お世辞」に代表され
る言葉に突き動かされた面がある。このような金と言葉の密
な関係を、万屋の初代は知っていたように思われる。ここで
あらためて、万屋の初代と二代目とのちがいを明らかにした
い。

すでに触れたように、「破産」一篇は、冒頭と末尾におけ
る美作の国の人々の声、浪人と二代目の表情、嫁と浪人の大
声など、物語のある部分が別の部分を思い起こさせる仕掛け
を多く含んでいるのだが、初代と二代目も対比して考えられ
るように描かれている。

第一に、家に訪ねてくる物売りへの反応を比較する。初代
の反応は、『日本永代蔵』巻二の一「世界の借家大将」の一
節を借用して、次のように語られる。

初生の茄子一つは二文、二つは三文と近在の百姓が売り
に來れば、初物食つて七十五日の永生きと皆々三文出し
て二つ買ふのを、あるじの分別はさすがに非凡で、二文
を出して一つ買ひ、これを食べ七十五日の永生きを願
つて、あとの一文にて、茄子の出盛りを待ちもつと大き
いのをたくさん買ひませうといふ抜け目のない算用、
節約と蓄財に心を砕いて生きてきた初代は、物売りに対し
ても、「皆々」とは異なる「抜け目のない算用」を見せる。

二代目はどうか。

正月も飾り物を一つ三文で売りに來れば、そんな安い飾
り物は小店に売りに行くものだや、家を間違つたか、と
大笑ひして追ひ帰して、三文はおろか、わが家には現金
一文も無いのをいままさらの如く思ひ知つて内心ぞつとし
て、

二代目は虚勢を張つてごまかさざるをえない。こうした対

比において、かつては初代同様「世に珍しく仕末の生れつき」であつた二代目が、表面を繕つて目の前の困難だけを乗り切ろうとする人間に変わったことが、より鮮明に浮かび上がる。

次に、初代と二代目との身なりを比較する。初代の身なりは「世には何染、何縞がはやらうと着物は無地の手織木綿一つと定め、元日にも賀入の時に仕立てた麻袴を五十年のわた着用して禮廻りに歩き、夏にはふんどし一つの姿で浴衣を大事さうに首に巻いて近所へもらひ風呂に出かけ」と語られる。やはり「世界の借家大将」を借用したこの一節からは、初代が世間の価値観を無視し、独自の信念に従つて行動していたことがわかる。

それに対して、後を継いでからの二代目は、「つき合ひと称して少し茶屋酒をたしなみ、がらにもなく髪を撫でつけ、足袋、草履など吟味しはじめた」と身なりへの関心を強める。しかも、嫁の格気によつてその欲求が満たされないために、「おのれ、いまに隠居が死んだら、とけしからぬ事を考へ、うはべは何気なさうに立ち働き、内心ひそかによろしき時機をねらうようになる。つまり、二代目は身なりを気づかうようになると同時に、人間関係においても表面だけを取り繕おうとするようになる。「うはべ」ばかりを重視するようになったからこそ、両替屋を始めた彼は、「表むきだけではあるがとにかく、むかしの万屋の身代と変らぬくらゐの勢ひを取りもどし」たことに満足覚え、「商人は表向きの信用

が第一」だと言ひ放つようになるのだ。

「うはべ」「表むき」を取り繕うことは、物事を判断する基準として「世間」の反応を強く意識し出したことを意味している。木村小夜氏が前掲論で、二代目が「自律的であることを自負しながらも結局は他者に左右される」ことを指摘していたが、そうした周囲の迷惑を意識せずにはいられない二代目の他律性は、世間体を気にせず貯蓄に励んだ自律的な初代と対比されることで強調されている。初代にとつて「隣」は専ら儉約のために利用するものとしてあつたのに、二代目には「隣」は視線を意識する対象としてある。ゆえに、ひたすらマイペースで貯蓄に勤しんでいた初代に対して、二代目が店を両替屋にして、ただ貯蓄するのではなく積極的な運用を志したのは必然であつた。両替屋とは、相場という「世間」の迷惑を反映するものに、いかに素早く正確に反応するかが問題となる商売だからだ。しかし、その「世間」への認識が甘かつたことは既に述べた。

初代が金と言葉の關係に対して敏感であつたことは、『徒然草』への強烈な敵意からうかがえる。この一節は『西鶴俗つれ／＼』巻一ノ一「過て克は親の異見悪敷は酒」から借用されているのだが、いささか唐突に挿入されているため、「作者」に何らかの意図があるのではないかと考えさせられる部分である。

きらひなものは酒色の二つ、「下戸ならぬこそ」とか「色

好まざらむ男は」とか書き残した法師を憎む事しきりにて、おのれ、いま生きてゐたら、訴訟をしても、ただは置かぬ、と十三歳の息子の読みかけの徒然草を取りあげてばり破り、捨てずに紙の皺をのばして細長く切り、紙小綫を作つて五十組の羽織紐を素早く器用に編んで引出しに仕舞ひ、これは一家の者以後十年間の普段の羽織紐、

跡継ぎが兼好法師の言葉に従つて振る舞うようになってしまつては、万屋の財産は危ない。そう考えたからこそ、初代は『徒然草』を専ら紙の集積として扱い、羽織紐として、あくまで物質的に活用し、自らの支配下においたにちがいない。初代が愠氣した嫁の大声をいたく喜んでいたのも、言葉の力を重視していたゆえだろう。

ただし、隠居した初代が、二代目が柄にもなく茶屋あそびを始めたことに慌てるのではなく、嫁が愠氣する声に夢中になるという本末転倒をおかしているのも事実である。隠居した初代はすでに、鼻紙を持っていただけで息子を勘当したかつての厳格さを失っている。

そのように衰えを見せる初代が「紙小綫の羽織紐がまだ六本引出しの中に残つてあると言ひ遣して」死に、続いて初代の妻も「その引出しに羽織紐が四本しか無いのを氣に病み」死んでゆくという経緯は象徴的である。いつのまにか無くなつていた二本の羽織紐の行方は書かれていない。しかし、こ

の紐がもともと『徒然草』から生成されたものであることを考えると、二本の羽織紐の紛失は、「下戸ならぬこそ」とか「色好まざる男は」といった酒や色を奨励する言葉が万屋初代の支配から逃れ出ていったことを意味している。それと時を同じくして、二代目夫婦は『徒然草』的な価値観の方に移行する。案の定、彼らは酒と色のために初代が築いた財産を崩し、再び色を楽しむために万屋を再興しかけるのであるが、まさに「酒の支度を言ひつけた」矢先に破滅に陥ることになるのである。

おわりに

「破産」は、中心人物である二代目の思考が初代との対比や語り手によつて相対化されることによつて、二代目が大財産を受け継いで以来、自分の変化を省みず、表と裏を使い分け、表向きだけを繕うようになり、ますます自分を見失つていったさまがうかがえる構造になっていた。賈の長者になりおおせた彼は、賈金によつて破綻する。また、そのように二代目を相対化することで、嫁との共通性や、使用人たちや茶屋の者たちや美作の国の人々も表と裏を使い分け、状況次第で豹変する点で彼と相似していることも理解される。

さらに、『徒然草』や嫁の罵詈雑言が密かな意味を持つことがこの小説の特徴であつた。(笑い)を誘う過剰な言動は、

表面的な読者へのサービスとしてのみ存在しているわけではなく、しばしばそこに注目することで、一篇の興行きを捉える手がかりにもなっている。「破産」に見られるこうした仕組みは、『新釈諸国噺』の他の短篇や、太宰治の少なからぬ小説に当てはまるものだと考えるが、その具体的な諸相については、今後の論考で明らかにすることとしたい。

注

- (1) 津島美知子『回想の太宰治』(人文書院、昭和五十三年五月)
- (2) 『太宰治翻案作品論』(和泉書院、平成十三年二月) および「『太宰治』という磁場——「吉野山」を視座として——」(『二十世紀旗手・太宰治——その恍惚と不安と——』和泉書院、平成十七年三月)

(3) 『太宰治研究 11』(和泉書院、平成十五年六月)

(4) 『恋と革命』(講談社現代新書、昭和四十八年八月)

(5) 「叙説」平成十八年三月

(6) 饗庭孝男氏『太宰治論』(講談社、昭和五十一年十二月)

(7) 寺西朋子氏「太宰治「新釈諸国噺」出典考」(近代文学試験) 昭和四十八年六月

(8) 「新釈諸国噺」(『太宰治 制度・自由・悲劇』法政大学出版局、昭和六十一年三月)

(9) 木村氏前掲論

【付記】「破産」の引用は初出によった。ただし旧字は適宜新字に改めた。

(さいとうまさお／群馬大学講師)